真・恋姫†無双～獣の王～

竜胆　霧

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
真・恋姫†無双～獣の王～

【Ｎコード】
Ｎ２１１４Ｑ

【作者名】
竜胆　霧

【あらすじ】
山から下りてきた獣の王、その能力は計り知れず。一体どのように干渉していくのでしょうか・・・・？恋姫の世界を獣が蹂躙します！作者がたまに気分転換程度で投稿する作品になると思いますので期待せずにお待ちいただければ幸いです

序章　獣の王現る（前書き）

気分転換でっす！

この作品面白いと思う方も居るかもしれませんが

あまり更新できないと思いますので！

そこを理解したうえでお楽しみいただけると嬉しいです

竜胆プレゼンツ、駄作オンパレードをどうぞごらんください

序章　獣の王現る

ふむ、久々に山を降りてみれば
我とは知らずに助けを求めるか・・・・・
野生を忘れた犬コロ風情が
しかし
声が聞こえたからには助けなければならぬな
月の光を浴び、風になびく透き通るような水色の長い髪にちょこんと生えた耳
蒼い目で下の犬を捉えると同時に小さな身体で断崖絶壁の壁を駆け下りていく
「牙狼」
がっしりしたその体躯に刻まれた傷は栄誉の証
紫の毛をなびかせながら少年に寄り添ってくるオオカミ
『何の御用でしょうか？』
「我はしばし犬を助けに行く、その間森のものを頼んでもよいか？」
『わざわざ王みずから出向くこともないと思いますが、それに人の

世界に行くのならば護衛をつけなければあぶのうございます』

「我は獣の王ぞ、人間ごときに遅れは取らん。それにお前らまで来てしまっては人間がお前らに危害を加えかねん」

『そうかもしれませんが・・・・王よ、あなたの容姿は人の目を引くのです。あなたが行っただけでも人はすぐに混乱すると思われますが？』

「確かにそれは否めぬ、だが何か羽織ればよかろう。幸い耳としっぽを隠せば人とそれほど変わらぬ」

『ですが・・・』

「何も言うな、我が力を欲した時はおぬしらを呼ぶ。世界に獣は溢れているしな・・・・連絡には事欠かぬだろう」

『っは！わかりました。我が王よ』

「ただ鼠忠は連れて行く、我があの犬ッコロを助けている間につれてこい」

『ならばさっそくつれてまいりましょう』

そういって牙狼は少年から離れ、一匹森へと引き返していった

それを見送って少年は声のする方へと足を速めていった

遠くの崖に月明かりに照らされて人らしきものが見えたとき希望が見えた気がした

『ご主人を助けてください！』

赤い髪の主人の傍らで必死に吠える

人間が自分達の声を理解できないことは知っているし、自分の声が届くとも思えないがそれでも吠える

『おねがいします！』

ここらは届かないかもしれない、そんなことを考える暇もないほどに吠え続ける

届け、届いてくれ

主人を助けんがために吠え続ける

すると人らしきものは落ちた・・・・いや、崖から急降下をし始めた

驚いた、人間じゃないのかな？

徐々に砂塵を巻き上げながら迫ってくるそれに願う

『もう誰だっていいから主人を助けてください』

「よかろう」

そういってまだ遠いと思っていたはずの人影が既に目の前にいた

本能で感じ取った。人とは思えないほどの威圧感、鋭い殺意に思わずしっぽを巻いて逃げてしまいそうになる

だけど主人がへばっている時にそんなこと出来るはずもない

『あ、あの・・・・お願いします助けてください』

「だからいいといっているだろう」

この人には驚きを禁じえなかった。僕の声が聞こえている？それにしっぽや耳まである。

「ふむ、空腹か？」

主人を見てそう判断する人にとりあえず事情を説明する

『その通りです。僕の主人は空腹のあまり倒れてしまって・・・・よければ食べ物を分けてもらいたいのですが』

「我は持ってはいない」

その言葉を聞いて絶望に打ちひさがれる。このままでは主人が飢え死にしてしまう！

「が、持ってくることは出来る。牙狼、話は聞いたな？」

『っは！それでは今から人の食べられるものを持ってきましょう』

いつの間にか来ていたオオカミが人の言うことを聞いて踵を返して崖のほうへと向かっていく

『あなたはいったい・・・・』

こんな事態になってしまってはさすがに相手の素性が気になってしまう。僕の主人を助けてくれるのはありがたいけど一体どういった人なんだろう

「我は獣の王。姓を珀、名を瑛、字を透清という」

僕の質問に答えてくれたのはいいんだけれど獣の王？一体どういう存在なんだろう

『僕はセキトといいます。すみませんが獣の王と言われても僕には良くわからなくて』

「別にかまわぬ、名前だけ覚えていればいい。いつかまた呼ぶ日も来るだろう」

『王、お持ちしました』

「苦労をかけた、こんなものでいいか？」

そういっていくつかの果物と魚を投げてくる。この短時間でよくこ

こまで集められるなー

そう思いオオカミの方を見やると珀瑛様には劣るもののやはり鋭い殺気を放ってくる

でもこの人ならまだ・・・

『小僧、あまり調子に乗ると殺すぞ？』

ひぃっ！どうやって心を読んだの！？

「牙狼その程度にしておけ、早く主人に食わせてやるといい」

その言葉に甘えて主人の下へと食べ物を運ぶ

「ん・・・・セキト」

主人が食べ物をがっつき始める

「お前の主人は健啖家のようだな」

『えっへん！そうなのです。僕のご主人は食べることにかけては天下一、そして武道も天下一、野生の勘も天下一なのです』

「ほぅ・・・・面白いことを言う。こやつが我に勝てると？」

そういってさっきよりもずっと濃い殺気を飛ばしてきます。漏らしてもいいのでしょうか

「セキト、下がって」

主人が前に出てくれます。ですが今の主人では心もとないです！僕が前に出ます

『ご主人には指一本触れさせません』

「ふむ・・・・・」

獣の王さんが僕たちの姿を見つめたまま何か考え込んでしまいました

「良き主従だな。それに赤い髪の・・・・お前もなかなか変わってるな、野生でないとはいえここまで人に付き従うものは珍しい」

「・・・・？」

首をかしげるご主人

「わからぬか、犬によく好かれているなといったのだ」

「・・・・（コク）」

「ふふ、なかなかに面白い人間だ。何かあれば我を呼ぶといい、名は聞いていたな？」

「・・・・なら恋のこと恋て呼ぶ」

「ん？・・・・それは真名ではないのか？」

「助けてもらった、それだけで十分」

「ならば我も真名を預けよう」

『王よ！そう気軽に蘭様より頂いた真名を預けてはいけません』

「牙狼よお前は人間でもないのに相変わらず人間以上にこだわるのだな」

『それは王が無関心すぎるのです』

「はははは、それは言うな」

「・・・・？オオカミと喋ってる？」

「気になるのか？まぁそれよりも真名をさっさと預けよう。これ以上うるさく吠えられてしまってはたまったものではないしな」

『王！なんてことをいっているのですかっ』

「我の真名は水、恋よ預かってくれるな？」

「・・・・（コク）」

なにやら口論もし終え、無事真名を交換することが出来たようです

「ふむ、それならば我はそろそろお暇しよう。鼠忠いるのだろ？」

『お呼びですか～？王様』

「こやつらにお前の子分をつけて見張らせろ、有事の際は我が助けになる」

『いいのですか～？蘭様にまた怒られるのでは？』

「母上は少しばかり気が短すぎる・・・・」

『王、それは進言させて頂く』

「っな！？牙狼、それは言わぬ約束だろう」

『約束もしていなければ、私の言うことを全く聞いてくれない王の言うことなど聞く必要を感じません』

「頼む、我が悪かったから・・・・・だから言わないでくれんか？」

「・・・・・変な人」

ご主人の一言でわいわい騒いでいたのが嘘のように静まり返ってしまいました

『貴様・・・・・今王になんといった？』

おおう！？威嚇しています、さっきまでの殺気はほんのお遊びだったのが分かってしまいました

「よい、牙狼気にするな。我はそれほど小さきものでもない」

『ですが』

「我の名を貶める気か？」

『すみません、でしゃばりすぎました』

『相変わらず牙狼の旦那は気が短いね～』

『黙れ鼠忠、お前をかみ殺してもいいのだぞ』

『うひゃ～、王様身を隠させてください』

『き、貴様！いつもそうやって王を盾に・・・・うぬぬ』

獣の王様の周りはにぎやかで楽しそうです・・・・ちょっと怖いですが

「我はもう山へ戻ろう、有事の際は恋、セキト・・・・我を呼べ」

「恋も行く」

まぁご主人ならそういうと思っていましたが

「む？それはならん、もうすぐ人間がここにやってくる。お前を助けるのはそこまでだ」

それはどこを見て言ってるんだろう？周りを見回してみても特に何も見当たらない

暗いせいもあるのかもしれないけれど

そう思ってキョロキョロしていると鼠忠と呼ばれていたネズミさんが王には見えるのだと教えてくれた

「恩がある、返したい」

「ふむ・・・・・ならばその犬や動物を大事にしろ。それが我の願いだ」

「・・・・？元々してる」

「そうか、それは行幸。ならばその外套をもらってもよいか？」

「・・・・（コク）」

ご主人の外套をもらって獣の王様が羽織って耳としっぽを隠してしまいました

月に照らされる姿がきれいだったからもうちょっと見ていたかったのだけれど

「本当はおぬしが目覚める前にまといたかったが、それほど驚いても居ないようだしいいだろう」

「・・・・？耳としっぽのこと？」

それは僕も最初は驚いたけど、いつの間にかなじんでるなー

「そうだ。普通ならば驚くだろう？」

「だから変」

「ふはは、確かにその通りだな。おまけに動物と喋るからな」

「喋ってる？」

「我は獣の王ぞ、獣と話せなくて何が王か」

「面白そう・・・・」

「ああ、面白いぞ。だがお前ならセキトとそれなりに意思疎通が出来るのではないか？」

その通りです！僕とご主人は意思疎通が出来るのです・・・・へへん！どうですか

「・・・・・？」

ご～～～しゅ～～～じ～～～ん～～～～

首を傾げないでください

「自覚なしにやってのけるか、ますます面白いな」

『王、そろそろいかねば』

そういってオオカミさんが獣の王様を急かします

「わかっているがちょっと思いついたことがあってな」

『はぁ・・・・・嫌な気はしますが仰ってみてください』

「これほど面白い人間が居るのなら人間の世界を回るのも悪くないとは思わんか？」

『怒りますよ？』

「もう怒っているではないか、のう鼠忠」

『ええ、怒ってますよね。というより怒ってない時なんてあるんですかい？』

『貴様図に乗るなよ？蘭様にいいつけますよ』

「これから出かけるのだから会わない、ということは怒られないという事だ」

『っな、王よ。あなたは自分の立場を理解しておられるのですか？』

「ああ、理解しているとも、母上ならきっと代役を務めてくれるだろう」

『死ぬ気なのですか？』

「っう・・・・わかったちゃんと言ってから出よう」

『出るのは変わらぬのですね』

「当たり前だ。一度決めたことを王が易々と破ってどうするというのだ」

『常日頃から好き勝手やってるだけのようにも思えます』

『それが王様のいいところだろうがよー』

『鼠忠！炊きつけるんじゃない』

「ははは！鼠忠は話がわかるな。それでは戻ろうか・・・もう人の視界に入ってしまう」

いうが早いか獣の王様はとても追いつけないほどの速さで走り去っていってしまいました

『っな！王、待ってください』

慌ててオオカミさんも追っかけていってしまいます

ぽつんと残された僕と主はその後にやってきた董卓という方の世話になることになりました

気づいてみると近くに鼠忠さんとは違うネズミさんがいました

どうやら部下みたいで僕たちのことを見守っていてくれるそうです

いつか恩返ししたいです。その時に呼べば答えてくれるでしょうか・・・？

序章　獣の王現る（後書き）

序章、どうでしたでしょうか？

お試し程度、気分転換程度に書いている作品ですが

感想なんかあったりすると地味に嬉しいです

でぁでぁ、次回があったらお楽しみください

一話　王の母は二人（前書き）

早くも感想をくれた方に感謝を

もう一つの作品でこの頃行き詰まりがちで困ってしまいます

だからといってここをメインに置くことはまだしませんが

やっぱりあちらが完結してからですかね

それでも期待にこたえてちょくちょく書いていきますのでよろしくです

一話　王の母は二人

我は今正座をしている

なぜ王たる我が正座をしているのだろうか？

それはもちろん・・・・

『水や・・・・・また勝手に下へ降りたそうだね？』

「我は王として見聞を広めねばなりません。一つ一つの種族の繁栄、それに伴う領土の拡大、それを行うだけの知識が必要なのです。母上」

『ほう、お前がそこまで考えているとは』

もうオオカミとも思えぬ巨体を上げ、こちらを異常な殺気を飛ばしてくる赤紫の毛のオオカミ

『ほざくな！　まだ若すぎるお前が人間の下へ出てどうするというのだ！　見世物にされ殺されるのが落ちであろうっ』

ビリビリと肌を振るわせる母上の殺気。心配されているのだと思う、そして殺されそうで怖い

いや、王たるものこれぐらいで屈してはいけない

「ですが母上！」

「水、下手な言い訳はおよしなさい。どうせ遊びたかったのか、誰かを助けるためだったのではない？」

そういって母上の隣から現れたのは山の中に私塾を設けている変わり者であり我のもう一人の母親、春だ

「うっ……母殿」

『春、こやつに人の恐ろしさを教えてやってくれんか？』

「私も人間なのですよ。蘭」

『ふははは、だからこそではないか。それにわしはお前を信じておるしの・・・・水の育て方を教え、わしら獣により狩りに効率のよい種族同士が協力してやる連携というものを教えてくれたからのう』

「それは私が蘭を気に入ったからです。人間を嫌いながらもその子を拾い、育て。あなたの跡継ぎ……獣の王にまで育て上げたのはあなたなのですよ」

『水は捨て子だったのだ……その容姿を疎まれてな。まるで１００年生き、仲間からも腫れ物扱いされたわしのようだったからの……』

「ふふ、蘭は何だかんだいって甘いんだから」

そういって楽しそうに会話する母たちを見て、我は恐怖を覚えずに入られなかった

母達が甘い……？　我が何度死にかけたと思っているのだ

赤子を口に咥えて振り回したり、それを見つけた母殿が母上を落ち着かせ、赤子の育て方を教えるまで我は色々吐きまくっていたとか……

そして物心付いた時にすぐに狩りの仕方を教えられ、一人で1年生活させられたり、戻ってきたと思えば人の言葉を覚えさせられたり、兵法から帝王学までみっちり教えられ・・・・

もしそれから逃げ出せば母上自ら我を半殺しにし、冗談ではなく我を谷から突き落とし。戻ってきたらまた勉強……

そのうち勉強だけではなく母上から群れの率い方、技を教わり。そのなかで各種族の族長とやりあい毎日ボロボロに……

特に熊の族長の千熊（ちくま）には相当こっぴどくやられ、やられたと判明すると母上にまたやられ……それでも母殿の勉強はやらされて

ガクガクブルブル

それが甘い？　我を殺す気だろうか

『確かにそうかもしれぬ。もう谷底に突き落としても平気で戻ってくるようになってしまったし、罰を改めねばならぬな』

「でも私達に出来ることはもう限られているわね……」

『そういえばそうよな、わしもほぼ全ての技を伝授し終え、肉体も我を凌ぐようになってきてしまった』

「母上！　そんなことありません！」

『水よ、わしが一番わかっているのだ。それにわしはお前の成長が嬉しい……』

「母上……」

『だから、春。わかっているな？』

「ええ、最後の仕上げを始めましょう……」

笑いながら近づいてくる一匹と一人

し、死ぬ！？

「牙狼！」

『ここにいますが』

「にげるぞ」

『そ、それはいくら王といえど勘弁願います』

「っぐ……鼠忠！」

『すいやせんが蘭様と春様から逃げられる策は用意できませんぜ王様』

「なん……だと？」

我がもたもたしている間に我を包む影

ッアァアアアーーーーーーーーーー！！！

その夜、王の叫びが山を奮わせた

とりあえず水をしめたあと、春に向き直る

『わしは水を旅に出そうと思う』

そういうと春は微笑みを返してきた

「私もそう思っていたところです。蘭」

『ふはは、やはり春はわしが見込んだとおりの人間だったな』

「蘭も私が気に入っただけはありますよ。ただ、私の教え子も一緒に行かせたいのだけれど」

『構わん、お前の見込んだものなのだろう？』

「ええ、もう少しすれば教え子も私から巣立つはずよ。それまで待って欲しいの」

『わしもまだ水に教えねばならんことが少しばかりある』

「ありがとう……」

『礼はいらぬ、わしはお前に何かと借りがある』

「それはいいっこなしですよ。水は私達の子なのだから」

『そうだったな……ならばなおさら礼はいらぬ』

「ふふ、そうですね」

本当に春に出会えてよかったと思う。わし一人では水は確実に育てられんかったし、こんな暖かな気持ちになることもきっと出来なかった

溢れる力を利用してわしを突き放した連中に復讐し、獣の王となってもわしの心はこれほど満ち溢れなかった

水と春がいてわしは初めてバケモノでよかったと思えるのだから

「私はそろそろ私塾に戻って弟子に最後の指南をつけてきます。多少時間はかかるけれど大丈夫かしら？」

『大丈夫だろう。おまえが弟子を育てるならわしは水をたたき起こして稽古をつけるぞ、牙狼！』

『わかっております。ただいまお持ちします』

そういってかけていく牙狼

「私も本当は水に勉強をもっと教えたかったんだけど……」

『お前はもう大体教え込んでいるであろう。後は実践ではないのか？』

「ふふ、そうですけど。実際に頭を使う機会がそう早く来るかどうか……」

『使うさ。水はわしらから逃れるためいつも頭をつかっておるし』

「そうでしたね」

水を持って戻ってくる牙狼をみやる

そういえばあやつもなかなかにわけありだったか……まてよ？　今の族長のリーダーは大体わけありか

ふはは、今思えば水はやはりわしのような変わり者を引寄せよるのう

牙狼が戻り次第さっそく厳しく行くかのう

これが最後の機会だと思うと腕がなるわ

『王様～。これは大変なことになりやすぜ……』

『何かいったか鼠忠よ？』

『いえいえ、蘭様が楽しそうだと思い』

『ふはは、わかるか……わしは今楽しいのだよ』

その夜、獣の王の叫び声がいつものように木霊した

地獄のような母上との鍛錬が1ヶ月ほど続いてやっと慣れてきたかと思ったら

『もうよいか……。水、お前は人間の下へ行け』

「え？」

『わしに教えることはもうない。わしが教えたことを今度は実践を通して体で学んで来い』

「母上？　いいのですか？」

『よい、春と共に決めたことだ。ただし、春の弟子、牙狼（がろう）、鼠忠（そちゅう）、香翼（こうよく）と共に行ってもらうぞ？』

「牙狼たちは別に良いのですが、母殿の弟子とは？」

『ああ、確かそろそろ来るはずだが……』

「遅くなったかしら？」

そういって母殿が現れると隣には隠れながらなにやら変な帽子を被った女の子が一人

「あ、あの……わた、わたし…姓を鳳、名を統、字をし……士元と申しましゅ！」

また随分と奇怪な喋り方だな、だがそれでも母殿の弟子。そうとう頭が切れるはずだ

「我は母上の後を継ぎし獣の王……姓を珀（はく）、名を瑛（えい）、字を透清（とうせい）　という。母殿の弟子と聞いている……期待しているぞ」

「ひゃ、ひゃい！　頑張りましゅ……」

「もしかして緊張しているのか？　これでも抑えているほうなんだが……」

そういって自分から自然に出る威圧感を頑張って抑える

「ち、違いましゅっ……そ、その。み、耳としっぽが」

「ああ、これか。あまり気にするな、人間の世界に行く時は外套を羽織っていくからな」

「え…、なんかもったいない」

「ん？　何がだ」

「な、なんでもないでしゅ！」

変な奴だな。我の顔を見おって、なにかついておるのか？

「牙狼、我の顔になにかついているか？」

『特に付いておりませんが』

「ふむ……まぁよしとするか」

「ふふ、まぁ水に見惚れても仕方ないわよね。私の自慢の息子だもの」

「っな！　母殿、そういったことは他人の前では口にしないで頂きたい」

「雛里ちゃんはもうあなたの仲間なのよ？　いつまで他人なんていってるいるの、これから世話になるんだから真名ぐらい教えなさい」

『春殿、それはいささか強引過ぎるのでは？』

『牙狼、春の決めたことに口を出す出ない……。春が信用する人物が信用できんのか？』

『申し訳ありませんでした蘭様。でしゃばりすぎました』

「私には牙狼ちゃんの声ってわからないんだけど注意されたのかしら？」

『その通りだ。まぁ牙狼は過保護だからのう』

「母上、母殿。あまり牙狼をいじめないでやってください」

「水鏡先生に話は聞いてたけど、本当に獣と話が出来るんですね」

「それはそうだが？　母上の声ならお前も聞こえるはずだが？」

「え？」

『わしが喋っているのに気づいていないのかこの小童は』

「ええ！？」

「面白いから教えないできたのよ」

『あい変わらず意地が悪いのう、春』

「蘭に言われる筋合いはないけれどね」

『言えておるわ、ふはははっ』

豪快に笑う母上を見て混乱しまくる鳳統。こいつも面白いな……なら真名を預けてもいいか

「鳳統、我の真名を預けるぞ。これからは水と呼べ」

「あわわっ、わわ、私は雛里でしゅ」

「雛里というのか、いい名だ」

「あ、ありがとうございましゅ……」

『うまく真名を交換できたようだな』

「ええ、これなら人間の世界に行ってもある程度は大丈夫でしょう」

『外套を被り忘れなければな』

「ふふ、確かに。水はどこか抜けているから」

「我はどこも抜けていないぞ！」

『いいえ、王はかなり抜けていると思います』

『そうそう、王様の抜け具合には感心しやすよ』

なんて失礼なやつらだろうか

「お前ら！」

「ぷっ…ふふ」

我たちのやりとりが面白かったのか雛里が小さく笑い出す

「む、むぅ……」

王としての威厳がこれでは無いではないか……

「さっさと香翼を捜して山を降りるぞ！」

そういって一人のしのし歩いていく

『いってしまったな』

「いってしまいましたね」

そういってどこかさびしげな顔をして水を見送る二人

『まぁ鼠忠がいるから、情報は入ってくるだろうがな』

「それがこれからの楽しみですね」

『そうだな』

しばらくのしのし歩いていると牙狼が話しかけてきた

『王、香翼なら王が呼べばすぐに来そうですが』

『確かに、香翼なら王様が呼べば一発で来るでやしょうね』

牙狼と鼠忠にそういわれ、そうかもしれないと思ってしまう。なんたってあいつは・・・・

バサッバサッバサ

『すーーーーいーーーーーさーーーーーまーーーーー』

「これだからな」

『山を降りると聞きましたよ。もちろん私も連れてってくれるんで

すよね？　いやつれてってくれなくても勝手について行きますよ！
　なんたって私は水様がいないと生きられないのですから。何故生きられないかと聞かれれば１０００にも及ぶ理由を伝えたいのではありますけれど、やはり一番大きな理由は私の水様分の補充が出来なくなってしまうことが大きいのです。水様分というのはやはり獣の王としての水様の獣たちに対する愛であり、私に対する愛であり。つまり愛！　水様の愛が欲しいのです。だから私も連れてってください、愛してください。いいえ、まずは私から愛しますから……』

「わかったから、香翼も連れて行く。母上からの言いつけだからな、嫌でも連れて行く」

『嫌でも連れて行く！？　それはまさか愛の表明でしょうか！　長年待ち望んでいた時がまさに、正に今きたのですか！　ああ、どうにかして今の言葉を残しておきたい……私の脳内に焼き付けてこびれ付かせて離れないようにしたい。ああ！？　私はどうして鳥頭なの、もう覚えていられない……』

「えっと……その鷲が香翼さんなんですか？」

そういって騒ぐ香翼をほっといて雛里が聞いてくる

「ああ、そうだ。わけあって我が助け、今では種族の多い鳥族の中で一番えらかったりするぞ」

「なるほど……あの、その香翼さんが騒いでいるみたいですけどいいんですか？」

「気にするな、いつもの事だ」

これは香翼の病気なのだ。助けた時から恋に落ちたのなんだのよく
わからないことを言ってきて、あなたにふさわしい鳥になりますな
んていって実行してしまうあたり恐ろしいのだが
鳥頭の癖に出会った頃のことは全て覚えているんだからやっかいだ
でもまぁ……さすがに香翼との間に子は残せないのだ、嬉しいこ
とにな
『今何かひどいことを考えませんでした？』
「我が考えるはずも無い」
『そうですよね？』
たまに鋭いのが嫌になる
『王よ、そろそろ外套を被りませんと、山を抜けますよ』
「そうだな」
そういって外套を羽織ると雛里がどこかもったいない！　て顔をし
ていた
「もったいない……」
言われた
「なにがもったいないんだ？」

「あわわ、な、なんでもないでしゅ」

『ふーん、このアマ邪魔だけどよくわかっているようじゃない。水様の容姿のすばらしさが！　思わず見惚れてしまうその透き通るような水色の髪！　そしてその小さい身体には誰にも負けぬ力が！　なによりその女のような顔つき！　もう私の興奮をかきたてるに十分な要素がつまりまくった水様の容姿を隠すその外套がにくい、いや、成り代わりたい！』

「なにか今香翼さんがすごいことを言っていた気がします」

「気にするな雛里、香翼はいつもよくわからないことをいう」

王たるもの小さいことを気にしてはいかんのだ

『王様、街が見えやしたぜ』

「ふむ、確かにな。だがこの崖雛里は降りられないか・・・・」

「え？　この崖を降りるつもりなんですか？」

しょうがないから我が持っていこう

そう思い雛里の手をつかみ上に軽く投げ、我の肩に乗せる

「あわわ！？　な、なにをしているんでしゅか！」

「喋らぬほうがいい、舌を噛むぞ」

そういって一気に崖を駆け下りていく

その間雛里がうるさかったが気にしない

なにせ王は小さいことは気にしないのだから

一話　王の母は二人（後書き）

さてさてなかなかいい具合に気分転換になる作品です

創作意欲が書きたてられるというかなんというか

まぁ書いてて面白いですね

このテンションのままもう一つの作品を書き上げようかな・・・・

二話　目立てば死！　雛里のついた嘘　前編（前書き）

かなり久々の更新です。

なんというか筆が乗ったので書きました。

次の更新はいつになるやらわかりませんが

見たい方はどうぞです！

二話　目立てば死！　雛里のついた嘘　前編

雛里を抱え、小さな街の近くにやってきたまでは良かった。

しかしここからは雛里に任せなければならない。やはり人間の町は雛里の方が詳しい、それにいくら書物や人づてに街の事を聞いたところで限界はあるのだから。

「雛里よ、立てるか？」

「あわわ…、世界が回ってましゅ～～」

どうやらちょっとばかり休む必要があるようだ。まったく軟弱なものだな…などとは言えるはずもない、なぜなら母上達から見た我もきっとこのようなものなのだし、なにか武術を学んだ人間とかではないのだから馬鹿にしたりなど出来るはずもない。

『まったくこの女狐可愛い顔して水様の腕の中に押しかけておいてさらに介抱してもらう何ざ１００億年早いんだけれど、というか今すぐにでも死んでもらいたい。ううん、殺したい！　でも水様が嫌がることは私はしないの、だってそれが愛だと思うから…、なんて献身的な私、いつか殺してくれる許可をくれるその日まで呪うだけ！　そう、呪うだけなの。なんて心が広いの……、きっと私が人間ならそこらの男は放っておかないでしょうね。ああ、私ってなんて罪な女……。だから許さないであげるの。いつか殺すのは決定事項だから』

雛里を庇う様な事を考えている水の前で香翼が盛大に毒舌を吐く、たまったものではないが止める手段も持ち合わせていない。

『香翼よ、そう言うものではない。人間は貧弱なのだ、王たる者民の為にあるべきなのだ。だからこそこの姿は正しいと思うぞ』

『何言ってんのよ。水様はいるだけで王なの、生まれながらに王なの、王の中の王なの。孤高の王なの！　何くだらないこと言ってんのっ、これだから地面に這いつくばって生きている卑屈な四本足の生き物って嫌い。というより気持ち悪い。だけど水様の前だから我慢してあげてるの。でも嫌いなのに変わりはないから』

『ああ、そうしてくれると助かる』

香翼と話していると大抵の話はそれるものだが、牙狼も慣れたもので話がそれたところで別段気にしない。というよりも話がそれるのを狙っているのもあるのだ。

実際に今も雛里の事から話を逸らせたのは牙狼の腕というものだろう。だがそうしなくても鳥頭な香翼はすぐに話した内容を忘れてしまうので正直無駄だが、すぐに庇ってやったのは牙狼の優しさなのである。

『牙狼の旦那も学習しやせんね～、香翼の姉御は王様以外は眼中にないというよりすべて見下していますから……。王様がいなけりゃ喋るだけで殺されちまいますよ。それなのに意見なんて通るはずはないでしょう』

『それもそうだが、いつか治るといいのとだな……』

『無駄な期待はしないほうがいいですぜ』

そんなやり取りを見て水が呆れたように溜息をつくのもいつも通りだったりする。

「お前たちは全く……」

実際この三人、いや三匹が水の周辺に集まって静かになった試がない。折角の休憩もこう五月蠅くては敵わないだろう。

「雛里よ、大丈夫か？」

「な、なんとか……、大丈夫でしゅ」

ふらつきながらも気丈に立ち上がり胸を張る雛里、全く大丈夫じゃなさそうだが、これ以上ここに留まっているのも何なので行動を起こさないといけないのだが、雛里から聞かないうちから町へと入るのは少しばかり憚られる。

それでも少しは回復しただろうし、多少の無理には付き合ってもらわねばなるまいと思い、素早く話し始める。

「もう目の前に町があるのだがどうすればよい？　我は山から下りたことはあるが人間がたくさんいるところに入ったことがわからなくてのう。いまいちルールがわからん」

「ルール？」

そういって頭の上に疑問符を浮かべながら若干首を傾げて雛里がこちらを見やる。

母殿の教え子なのだからルールという言葉ですぐにわかりそうでは

ありそうなのだが、やはりまだ疲れが十分に取れていないのでは？
　と思いつつも話を進める以外に選択肢はない。

「それぞれの獣にはそれぞれのルールがある様に、それは人間もあるものだと聞いていたのだが……、違うのか？」

そういって真意を問うために、また雛里の体調を気遣ってその瞳を覗き込む。

「あ、あわわっ。だ、大丈夫ですから。ちょっと離れてくだしゃぃっ！」

もちろん水のドアップな顔など免疫があるはずもなく、雛里の顔を朱く染め上げながら若干強い口調で喋ったり、かみかみで喋るのも無理もないことではあるのだが

そんな雛里の心情など人とほとんど交流したことのない水が理解できるはずもないし、雛里のかみかみ口調が緊張の為にそうなっているとは思っていない為、今の状況を悪い方へと受け取ってしまうのも、また無理からぬことなのである。

「む、そうか……」

何か悪いことをしたのだろうと察し、若干の距離を取る。だがそんなことを黙ってみていることのできない者が若干一匹。

『なに水様に気を使わせんてんのよこのメスブタならぬメスガキ！
　てめぇをこの牙狼に食わせて骨までしゃぶらせてやろうか？　しゃぶしゃぶにしてやろうか？　うまいのか？　ぁぁあああ！？　』

相変わらずの毒舌というか、酷い暴言だが特に言われ放題な雛里を気にする必要はない。

なぜなら香翼がどれだけ雛里に文句を言ったところでただ暴れて鳴いているようにしか雛里には見えないのだ。さらに出会ってからこれまでほとんど暴れまわっている為、その姿が普段通りなのだろうと雛里に思わせるには十分なもので、香翼の毒舌が雛里に届くことはないのだ。

『なぜ私なんだ……。私はそんな風に思われているのか？』

そんな中なぜだか引き合いに出された牙狼だけが心に若干の傷を負っていたりした。

「そういうな香翼。恐らく我が何か気に障ることをしたのだろう」

そう言って香翼を落ち着かせる為に笑顔を見せたのだが、その言葉を聞いた途端に雛里があわあわと慌てはじめた。

「ち、ちがっ……。その…、そうじゃなくて」

慌てながらも水の言葉を否定してくる雛里には若干困惑をせざるを得まい。

「ではなぜだ？」

当然の疑問ではあるものの、慌てている雛里に追い討ちをかけるような言葉を使ってしまったのは失敗だったといえよう。

「えっと、それはその……。ルール……そう、ルールです！」

「ふむ、どういうことだ？」

話が進むのは喜ばしいことだが、ここまであたふたしていて大丈夫なのだろうかという疑問は尽きないが、何とか息を整えた雛里がこちらにチラチラを目をやりながらルールを説明し始める。

「人の顔を無暗やたらに覗き込んではいけないんです」

「なるほど……。だが母殿は人と話すときは目を見てからと教わっていたが…」

「きょ、距離……距離の問題です。よほど近しい関係でもないとあそこまで接近しません……」

「難しいな。仲間というのはそこまで近しい関係ではないのか？我は仲間も家族も同じようなものだと考えているが」

「かかか、かじょくだなんて……。あわわ」

雛里と話していると話が進む気がしないのはなぜなのだろうか？

「まあ、それは後々改善していくとして街でのルールとかはないのか？」

家族という言葉のダメージからはまだ回復しきっていないものの、水に改めて言われて雛里は考えをめぐらし始める。

ルールと言えば窃盗や殺しなどがダメではあるものの、そこは水さんの事だから理解しているでしょうし、他に困ったことと言えば…

……。

あ、そうです。水さんの容姿はかなり問題ですね。もし見つかったりしたら何処かに売り飛ばされて、王から一転して奴隷に成り下がってそこからはもう言葉に出来ないほどの……あわわっ。

「おい、大丈夫か？」

真面目に考え始めたと思ったらすぐに真っ赤になってワタワタし始めた雛里に思い切って声をかけてみたものの、結果は相も変わらず慌てたままである。

「あ、あわわ！？　そうでしゅ。水さんの姿……獣耳としっぽを持ってる人とか、目立つ。とにかく目立つと殺される決まりなんでしゅ！」

慌てながらとんでもない事を口にしたのだが、当の本人である雛里にその自覚はない。

「なんだと……？」

『それが本当の話なら王、ここはひとまず迂回された方がいいのでは？』

『それよりも王様以外にそんな外見の奴らが居たってことがあっしには気になりやすがね』

『水様、こんなメスブタゴミクズバスタオルのいう事なんて聞かないでそのまま乗り込んで制圧あるのみです！　制圧して逆に処刑して吊るして油で揚げてしまえばいいんです！　そうです。油で揚げ

てカリッとしたところで土葬するんです。そしてそのまま水をやればそこから人間よりましな植物の芽が出れば完璧です！　そうしてやりましょう。そうしましょう。ええ、それがいいです。あれ？　どうやって殺すんでしたっけ、まあいいです。とりあえず殺しましょう』

三者三様の意見を同時に言うものだから何が何だかわからん。

「仕方ない。少しばかり不便ではあるが我の容姿が目立つのは分かっているからな……。見られないように細心の注意を払うとしよう」

そう言って街に向かって歩き出す水に三匹が喚きながら後へと続き、雛里は自分のついた嘘に慌てていた。

街頭を深く被り、ネズミを肩に乗せ、鷹と狼を従えて歩いている二人組……

どうすればいいでしょうか、明らかに目立っています。

嘘だったっていえば済むことなのに周りの動物たちが怖くて正直にいえないというか、水さんに話しかけること自体が難しいというか、あわわ～、どうしたらいいんでしょうか。

そんな考えを頭の中でループさせながら黙々と歩く雛里を余所に人々の視線が刺さりまくっているのは言うまでもないし、それに気づかない水ではない。

「なんだか目立ってるのではないか？」

『そりゃあ目立って仕方ないですよ！　だって水様がおこしになられたのだから！　ああ、でもこの無知で蒙昧な愚民共は水様のオーラに嫉妬して殺そうとするんですね！　ぁぁあああああああ、忌々しい、私と水様以外の存在が忌々しい！　殺してしまいたい、うううううう、あああああああ』

「……香翼は置いておく手して、何が原因かわからない事には手立ても考えられぬぞ」

『王よ……。こう言ってはなんなのですが、香翼が暴れて汚い言葉を吐きまくっているせいで目立っているのではないかと？』

「ふむ、それはあるな」

『牙狼の旦那も結構見当はずれな事をいいなさる……。まあ、それも外れではありやせんがね』

『ほう……。そこまでいうのなら貴様は分かっていて当たり前だろうな？　鼠忠、貴様な何が原因だと思うのだ？』

『それは決まってやすよ。あっしらが王様と行動を共にしてるのが目立ってるんでさ』

確かに考えてみればそれが一番的を射ている気がするが、こればかりは対処のしようがない。

『それが原因だとすれば我々は王から離れなければならん』

『それが一番の解決策ですよ、牙狼の旦那』

『それだけは出来ん』

『そうは言ってもこのままじゃあ王様が殺されちまいやすぜ』

『それはわかるが我らは護衛なのだ。そう簡単に王の傍から離れる事は出来ん…。それに我らが離れて何かがあってはそれこそ問題となるだろう』

『牙狼の旦那はお固いねぇ、そんなこと言ってたらいつまでたっても王様離れができやしませんぜ』

『貴様図に乗っているのか？　私が貴様より格上だという事が理解できていないらしいな』

『あっしは戦いは戦いでも情報戦が分野なんでやすが？　そんなこともわからないとは救いようがないでやすね』

こうなることは目に見えていたとは言え、この一触即発の空気はどうにかしてもらいたいものだ。正直目の前でやられていると鬱陶しくてかなわん……

そんなことを思いつつ、三者三様に街の中を歩いていく。

時折美味しそうな匂いにつられそうになりながらも街見物はある程度順調に進んではいたのだが……

少しばかりがっしりしたオッサンとチビとデブが道の真ん中を陣取っていた。

「おいおい旅人さんよ。持ってる有り金全部おいていけ」

「兄貴ー、こいつら動物連れてますぜ」

「この動物ももらっちまいしょうぜ！」

口々に好き勝手を言い張る強盗まがいの男どもは誰にいちゃもんをつけているのか理解していない。

「我に命令するとは随分と偉い身分なのだろうな？　もしかしておぬしのような者がこの国の皇帝なのか？　だとするとこの国の先は短いな」

「何言ってやがる。俺様は強盗ってやつだ。皇帝だろうが誰だろうが物を奪えりゃそれでいいんだよ！」

そう言いつつ水に向かって襲い掛かるオッサンを気にした風もなく水は興味を失ったようにそのまま歩いてゆく。

オッサンの手が水に届くことは決してなかった。なぜならそれを許すものがここにはいないからである。

『お前らみたいな野蛮な猿が生きてるから私が不機嫌になるんだよクソガァアアアアア！　水様との甘いアバンチュールを邪魔して生きて帰れると思うんじゃねえぞ！　ひゃっはあああああ！』

『貴様ら死にたいと見える。ならば望みどおりにしてやろう』

オッサンとチビを瞬時に牙狼と香翼が光となり交差し、二人の強盗を地面へと鎮める。

そんな中、デブには相手がいないため、一人だけ運よく生き残り、水の目の前へと立ちふさがることに成功した。

だがこれは運の尽きと言える。牙狼と香翼なら目や足などの一か所を一生不自由させられるがそれでも生きられている。

しかし水の前に立ちはだかって生きられる生き物は少ない。

「貴様邪魔だ」

そう言って一蹴すると何もなかったようにまた歩き出した。

蹴られたデブはというと家にぶつかり、貫通し、絶命しながら水の視界に決して入らぬ場所まで飛んで行った。

こんな騒ぎを起こしてただで済むはずがないと雛里が気づいたのは事がすべて終わってからだった。

「あわわ、これは大変です。どうしたら……、あわわ～～～～～」

二話　目立てば死！　雛里のついた嘘　前編（後書き）

雛里はこれからどうなるんでそね

ニシシ

水の力のいったんをお見せしましたがどんなもんでしょ？

続きは期待したいけど期待できない！　っていう具合にお待ち頂ければと思います。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2114q/

真・恋姫†無双～獣の王～

2011年11月8日09時11分発行